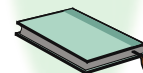
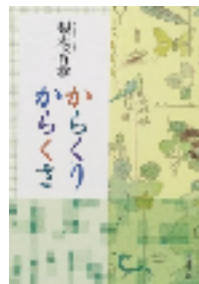


## この本と私



## からくりからくき

梨木 香歩



新潮文庫

祖母が遺した古い家で共同生活を始めた4人の女性たち。世間のスピードとはちよつと違つた速さで、毎日が過ぎていきます。彼女たちは、草や木で糸を染め、機を織り、時には庭に生えた草が食卓にのるような生活をしています。もちろん、これは現代の話。江戸や明治の話ではありません。静かに、淡々と積み重ねられていく日々は、どこか懐かしく、感じられるところがありました。

そして物語は、祖母からもらった心を持つ人形「りかさん」を中心に進められていきます。染色と機織りだけが彼女たちの共通点ではなく、自分たちが生まれるもつと前に「りかさん」を通じて関係があつたということがわかります。これだけなら、不思議な人形のファンタジーになってしまいますが、私はそうは思いませんでした。彼女たちにはそれぞれ、思惑や葛藤があり、日々、悩みながら、考えながら生きている。「りかさん」は、「つながり」をクリアするためのキーワード。今、ここにいるのは偶然ではなく、必然なのだということに気付きます。先人たちが、生きて、生きて、伝えて、伝えてきたことを受け継ぎ、また次につないでいく。一人一人はとも小さな点でしかなくても、点が集まれば線になる。そして、線は面に、面は立体に次々変化していく。生きていくことは、常に変わり続けること。次につなげるための「何か」を持ちたい、できるなら形として。そういう思いが生まれてきました。

佑起子